

茨城県麻しん陽性確定例検出の経緯と対応

茨城県衛生研究所

○絹川恵里奈 新堀もなみ 小室慶子 大久保朝香
大澤修一 檜村諒 上野恵 阿部櫻子 柳岡知子

【はじめに】

麻しんは、麻しんウイルスにより引き起こされ、空気感染、飛沫感染及び接触感染と様々な感染経路を示し、感染力は極めて強い。一過性に強い免疫抑制状態を生じるため、合併した別の菌やウイルス等における感染症が重症化する可能性もある感染症である。

2023年4月、県内で輸入感染症と考えられる麻しん陽性事例が4年ぶりに発生した。今回、本事例の疫学及び分子疫学解析を行ったので、その結果及び本県での対応について報告する。

【発生状況の概要】

当該患者は県内在住30代男性で2023年4月X日インドから帰国し、4月X+7日発症。主訴として、発熱、頭頸部から体幹、四肢へと広がる紅斑、咽頭痛及び下痢であった。4月X+10日に県内医療機関の発熱外来を受診・入院となった。4月X+12日に当該医療機関より、管轄保健所へ蚊媒介感染症疑いで相談があった。4月X+13日当所へ蚊媒介感染症、麻しん及び風しんの検査目的で検体が搬入され、搬入当日に麻しんウイルス陽性が判明した。

【方法】

当所に搬入された尿、全血及び咽頭ぬぐい液において、デングウイルスD1～D4型、ジカウイルス、チクングニアウイルス、麻しんウイルス及び風しんウイルスのリアルタイムRT-PCR法を実施した。その後、麻しんウイルスにおけるN遺伝子とH遺伝子を標的としたコンベンショナルPCR法を実施した。N遺伝子について、ダイレクトシーケンシング法で塩基配列を決定し、系統樹解析から遺伝子型を判定した。

【結果】

リアルタイムRT-PCR法において、全ての検体から麻しんウイルス遺伝子が検出された。その他ウイルス遺伝子については陰性であった。コンベンショナルPCR法では、咽頭ぬぐい液及び尿検体より、N遺伝子及びH遺伝子が検出、血液検体からはH遺伝子のみが検出された。決定された塩基配列から系統樹解析により、麻しんウイルスD8型であることが判明した。

【考察】

麻しんウイルスD8型はインドで流行していること、潜伏期間とインド渡航時期が一致することからも、本事例は輸入感染症であると考えられた。

本事例では、保健所との連携により、当該医療機関における接触者対応の早期開始が実現した。また、報道による全国的な注意喚起が行われ、感染拡大防止策を早期に講じることが可能となった。引き続き、関連機関との連携を強化していきたい。